

Jリーグの観客動員要因に関する研究

～スタジアムの新築・改築、満足度、クラブ成績に着目して～

スポーツコミュニケーションゼミナール 1314036 杉尾 武紀

1. 研究動機・研究目的

J. LEAGUE DATE Site (2016) の集計によれば、年間の総観客動員数はやや増加傾向にあるが、日本のサッカー人気の上昇を加味すると観客動員数の推移は望ましくないというのが現状である。

Jリーグ各クラブの収益の柱は、広告料収入、入場料収入、物販収入と言われている(山下, 2017)。この中でも入場料収入は、他の 2 つの収入に直接的な影響を及ぼす観客動員数と直結するため、重要度の高い収入源である。それにしたいが、クラブ側からするとより多くの観客がスタジアムに足を運ぶように、多種多様な施策を打ち出すことが必須である。そこで注目したいのが、どういった年に多くの観客を動員することに成功しているのかという点である。そこで本研究では、Jリーグ開幕後にスタジアムを新築、または大規模な改築を行ったクラブの観客動員数の推移を調べるとともに、各クラブの観客動員要因について、スタジアムの新築、改築や満足度、チーム成績などがどのような影響を与えているかについて研究することを目的としている。

2. 研究方法

【調査内容】

1. スタジアムの新築、改築が観客動員数にどのような影響を与えているかを調査した。
2. 各クラブの成績、スタジアムの満足度が観客動員数にどのような影響を与えているかを調査した。

【調査対象】

1. 1999 年時点で Jリーグに加盟していた 25 クラブのうち、リーグ加盟後にスタジアムを新築、または大規模な改築を行った 12 チーム。
2. Jリーグが 2 部制に移行した 1999 年に Jリーグに加盟していた 26 チーム。

【調査対象期間】

1. 各チームのホームスタジアム情報については 1993 年より 2016 年以前までを範囲とした。
2. スタジアム観客動員数、各チームの成績は 1999 年から 2016 年までを範囲とした。サービス満足度調査のスタジアムに関する項目は 2011 年、2012 年、2013 年を対象とし、各年 Jリーグディビジョン 1 に参戦していたチームのみとする。

【調査方法】

1. ホームスタジアムを新築、または大規模な改築を行ったクラブを抽出し、観客動員数と新築・改築した年を照らし合わせ、文献調査を行った。
2. J. LEAGUE Data Site にて Jリーグディビジョン 2 が発足した 1999 年から 2016 年までの各クラブの観客動員数を調査し、1999 年から 2016 年までの成績と各クラブのホームスタジアムの開場された年、改築した箇所、年や鈴木 (2014) による 2011 年、2012 年、2013 年 J

リーグのサービス満足度調査のスタジアムに関する項目のデータを用いてそれぞれの因子がどれだけ観客動員数に影響を及ぼしているか文献研究を行った。

3. 主な結果と考察

Jリーグは世界的に見て、歴史の浅いリーグであるため、潜在的なファンが多いと考えられることから、新築効果が12年以上持続するという仮説を立てた。本研究ではスタジアムを新設すると観客動員数が増加することが明らかになり、仮説が証明された。スタジアム新設後5年目には新設以前の平均観客動員数と比較して、271%の観客を動員している。また新築効果は19年以上続くことが明らかになった。

昇格後1年目は観客動員数に正の影響を与えることが分かっている。よって前年度の成績が観客動員数に影響を与えるのではないかと仮定した。また、トイレの数や配置、スタジアムまでの距離などが再観戦意向に影響を与えることが先行研究で証明されている。よって、スタジアムの満足度が高い年は観客動員数が多いという仮説を立てた。本研究では昇格1年目に全クラブにおいて観客動員数が増加し、降格1年目には観客動員数が減少することが明らかになった。またスタジアムの満足度は改築、クラブの成績と関係性が見られたものの、観客動員数との関係性は見られなかった。

4. 結論

観客動員数を増加させるには、新規のファンの獲得が必要不可欠である。本研究において、スタジアムの新設、大規模な改修が観客動員数を増加させるのに有効であることが明らかになったが、ただ、新設や改築をするのではなく、エンターテインメントの要素を加えて新設、改築を施すことで、新たな魅力が生まれ、新規のファンのつながる可能性があると言える。Jリーグのような世界からみたスモールリーグでは新設や大規模な改築は難しいかもしれないが、ガンバ大阪の事例で、寄付金や助成金を最大限に活用することで、スタジアムの新設が可能であると証明された。観客動員数の増加はクラブの収入が安定し、チームを強化させることができるだけでなく、スタジアムに足を運ぶ方々の飲食費や交通費、宿泊費など多岐に渡る出費による経済効果を期待することができる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文ではJリーグの観客動員要因についての研究を行いました。至らない点の多い論文ではありますが、普段から疑問に思っていた部分をテーマにし、研究を行えたことで自分自身にとって、とても大きな経験となりました。

本論文の執筆にあたり、多くのアドバイスやご指導を頂いた伊藤真紀先生に心より感謝致します。伊藤真紀先生には、普段のゼミナール活動や就職活動においても、親切かつ細やかなご指導を賜りました。自分自身の力不足でご迷惑をおかけしましたが、伊藤真紀先生のおかげで充実したゼミナール活動、大学生活を送ることが出来ました。また、共に切磋琢磨しながら卒業論文の作成を行った、スポーツコミュニケーションゼミナールの皆様には多くの刺激を受け、論文作成の大きなモチベーションとなりました。本論文の執筆経験、ゼミナール活動や部活動など、4年間の大学生活で学んだことを糧に、この先も精進していきたいと思っております。